

ARTIZON
MUSEUM

野見山
暁治

NOMIYAMA Gyoji

NOMIYAMA Gyoji

野見山 暁治

野見山暁治は油彩画を表現の中心としつつ版画、絵本、本の執筆など幅広い分野で活動しました。その画業は戦前、戦後、そして現代と約80年におよびます。日本近代美術史の展開と併走しながら、しかしどの潮流とも距離を置き独自の画風を確立しました。惜しくも今年6月に102歳で逝去されました。展示準備に向けて作品調査をしていた矢先の訃報でした。

石橋財団と野見山の関係は、1952年までさかのぼります。それは野見山のパリ留学を支援する渡欧後援会に、プリチストン美術館設立者の石橋正二郎が名前を連ねたことから始まります。その後1958年に、当時パリ在住であった野見山の個展をアーティゾン美術館の前身であるプリチストン美術館で開催しました。50年ほど後の2011年には、石橋美術館（現・久留米市美術館）とプリチストン美術館にて大規模な回顧展「野見山暁治展」も開催しています。

現在、石橋財団は野見山暁治の作品を7点所蔵しています。そのうち3点は、近年新たに収蔵した作品です。本特集コーナー展示では新収蔵作品3点を初公開するとともに、当館所蔵の野見山作品を一堂に展示し、その作品の魅力にせまります。



野見山暁治

野見山暁治は1920年に当時の炭鉱町、福岡県穂波村(現・飯塚市)に生まれます。油絵画家を志して1938年に東京美術学校油画科予科に入学。その頃の本科の教授は藤島武二、岡田三郎助、小林萬吾、南薫造でした。東京美術学校でのアカデミックな教育に馴染めなかった野見山は、画集や雑誌を通して佐伯祐三や関根正二の作品を知り、次第にフランスのフォーヴの画家たちに惹かれるようになります。

戦後は福岡と東京を拠点に制作を続けますが、1952年12月、念願であったパリに渡ります。西洋美術の造形理論や構造的な画面構成などを貪欲に学ぶ傍ら、パリのギメ東洋美術館で東洋美術に触れ、東洋画に魅力を感じるようになります。1964年、約12年の西欧生活に終止符を打ち日本へと帰国しました。

帰国後は逆カルチャーショックを経験しランプにも陥ったものの、着実に独自の画風を築き上げていきました。それは、西洋で学んだ三次元の物体の量感を二次元に捉え直すかと、東洋画から学んだ有機的な空間構成とが融合されたようでもあります。現実の風景や物質から触発されたイメージを何度もデッサンしながら、いらぬものを取り除き、再構成され変形されたかたちは、もはや出発点の原形からかけ離れ、それ自体が新しい生命を得たように画面に異なる表情を見せています。具象と抽象のあいだを漂う野見山の作品は、タイトルとともにみる者の想像を掻き立て、私たちを現実とは異なる世界へと誘います。



パリに向けたラ・マルセイーズ号の船中にて。
左から2番目が野見山、1952年
On board the La Marseillaise, bound for Paris,
1952. Nomiya is second from the left



同舟舎の晩餐会にて。前列中央が小林萬吾、その右隣が野見山、左隣は駒井哲郎、1938年
A dinner party for the Doshusha School of Western painting, 1938. Front row center is the teacher, Kobayashi Mango, with Nomiya to the right and Komai Tetsuro to the left



池袋モンパルナス、アトリエ村での野見山、1943年
Nomiya's studio in the Ikebukuro Montparnasse Atelier Village, 1943

石橋財団と野見山暁治

1958

野見山暁治作品展



展覧会ポスター、会場風景
Poster and installation view of the Works of Nomiya Gyoji Exhibition in 1958

2011

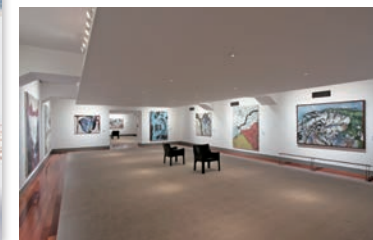
野見山暁治展



展覧会ポスター(石橋美術館)
Poster for the Nomiya Gyoji Exhibition in 2011 at the Ishibashi Museum of Art



展覧会ポスター、会場風景(ブリヂストン美術館)
Poster and installation view of the Nomiya Gyoji Exhibition in 2011 at the Bridgestone Museum of Art



タヒチというタイトル、なんでつけたんだろうか
地名をつけるのは稀なんです
何か魔性のものが覗き込んでいるような

— 野見山暁治、2023年5月9日、糸島のアトリエにて

最初は黒の線だけで ああじゃないと悩む
色が入ってくるのは、黒の線が決まってから

— 野見山暁治、2023年5月9日、糸島のアトリエにて



野見山暁治《タヒチ》1974年 新収蔵作品
NOMIYAMA Gyoji, *Tahiti*, 1974, Recent Acquisition

1971年に結婚した妻京子との最初の旅行で、野見山はタヒチを訪れます。タイトルに地名をつけるのは稀と言う野見山にとって、初めての南国はそれだけ印象深かったのかもしれない。この作品は1974年第1回東京国際具象絵画ビエンナーレ展に出品されました。具象的なイメージが残っていますが、果たしてそれが何を表しているのか、私たちの想像に委ねられています。



野見山暁治《予感》2006年 新収蔵作品
NOMIYAMA Gyoji, *Hunch*, 2006, Recent Acquisition

何を予感してるんだろう
作品とタイトルは合っていない
何かならないかなと思って描いていたら、なんとなくこうなった
でも線を引いてからじゃないと
線から画面にどんな動きが生まれるのか
自分のなかに何かがないと描きすすめられない

— 野見山暁治、2023年5月9日、糸島のアトリエにて

タイトルを英訳する際、良い予感なのか悪い予感なのか、訊ねてみました。
野見山から返ってきたこたえは「どっちも」。

ちょっと重たいポテッとした感じ
軽快な感じがないね

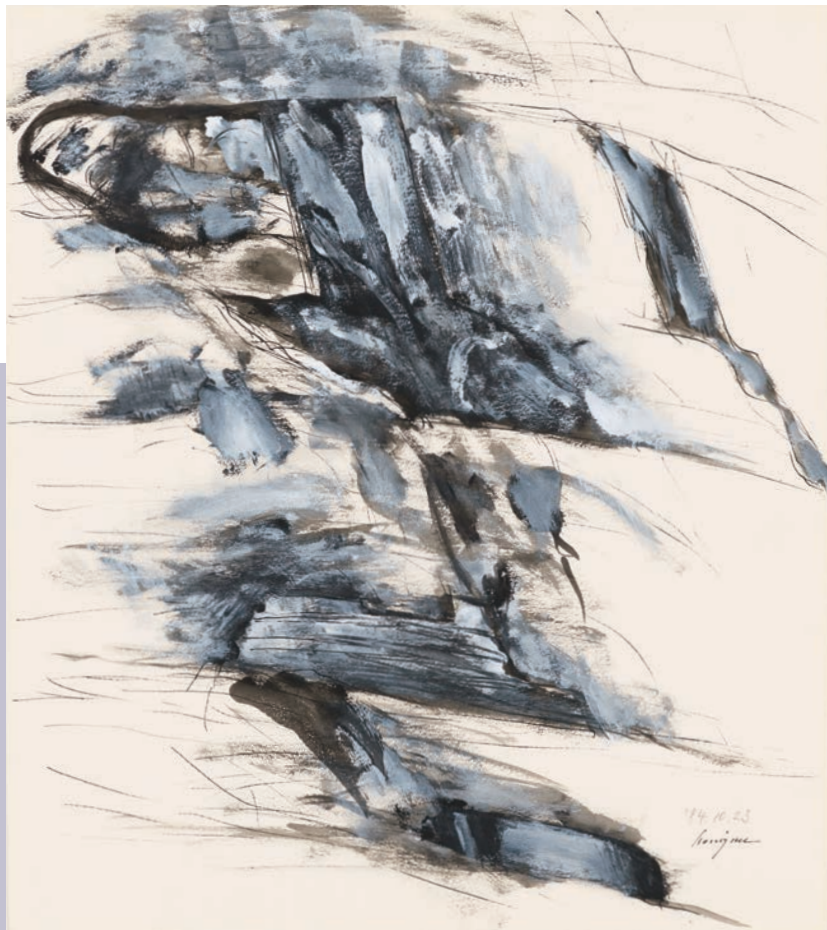
— 野見山暁治、2023年5月9日、糸島のアトリエにて



野見山暁治《振り返るな》2019年 新収蔵作品
NOMIYAMA Gyoji, *Don't Look Back*, 2019, Recent Acquisition

2020年に東京メトロ青山一丁目駅に野見山によるステンドグラス壁画が設置されました。この作品はその壁画制作にあたり描かれた3点のうちの1点です。野見山は壁画の制作に取りかかる前に青山一丁目駅周辺を探索し、その時に印象に残った赤坂御所の豊かな緑にインスピレーションを得ました。

筑豊の炭鉱地帯で生まれ、父親が炭鉱業を営んでいた野見山にとって、鉱山やその副産物であるボタ山は身近な風景でした。野見山は「どす黒いボタ山は私の絵画理念の根底になっている」と語っています。この作品は、大分県津久見の鉱山取材の際に制作され、黒とグレー、グレーが混じる白のみで彩色された画面からは、鉱山の人工的な風景が見てとれます。それは野見山の心にずっとある原風景の一片を写しだしているかのようです。



野見山暁治《鉱山から》1984年
NOMIYAMA Gyoji, *From the Mountain*, 1984



野見山暁治《風の便り》1997年
NOMIYAMA Gyoji, *Message from the Wind*, 1997

画面全体を覆う水色と、それを大胆に分断するV字の太い黒線が特徴的な作品です。薄塗りによって透けて見える下地と奔放な筆致は、動く風の気配を感じさせます。1976年、福岡県糸島にアトリエを建ててから、野見山はバルコニーから眺めた海、空、風の様子といった自然を題材に、多くの作品を制作しました。この作品はアトリエに近い浜辺で見た風景に着想を得ています。野見山の関心は見た風景を写実に描くのではなく、そこから読みとったイメージを出発点にして新しい創造を生み出すことに向いています。



野見山暁治《あしたの場所》2008年
NOMIYAMA Gyoji, *The Place Tomorrow*, 2008

左上部に描かれた有機的な黒い線の襲と、所々にのせられた鮮やかな青が目を引きまます。他の大部分を白絵具がヴェールのように薄く覆っていることで、一段と左上部が引き立って見え、また画面に奥行きを与えています。野見山は油彩画を表現の基本としつつ、版画や絵本、本の執筆などその活動は多岐にわたります。この作品が制作された同じ年にはステンドグラスの壁画制作にも取り組み始め、野見山の表現は新たな領域へと拡大していきました。

2011年に開催した回顧展「野見山暁治展」(石橋美術館、プリチストン美術館)で初めて発表された本作。野見山作品に今までなかった色調の赤が用いられています。野見山はステンドグラス制作を通して光を透過して見える赤の色彩に感化され、それを絵画制作にも反映するようになります。これ以降に制作された作品に同じ色調の赤が確認できることから、その表現に成功した最初の作品として位置付けられます。90歳を超えてなお新しい表現に挑戦した野見山の意欲が現れています。



野見山暁治《かけがえのない空》2011年
NOMIYAMA Gyoji, *The Irreplaceable Sky*, 2011

関連年表

- 1920年 0歳 12月17日福岡県嘉穂郡穂波村(現・飯塚市)に生まれる。
- 1938年 17歳 東京美術学校油画科予科に入学。
- 1943年 22歳 東京美術学校油画科を戦争のため半年繰り上げ卒業。
応召、満州に派遣。肺浸潤により東寧第1陸軍病院に入院。
翌年、内地送還。終戦を傷痍軍人福岡療養所で迎える。
- 1948年 27歳 第12回自由美術家協会展に初出品、自由美術家協会賞を受賞、会員に推挙。
- 1952年 31歳 フランス政府私費留学生としてパリへ留学。
- 1956年 35歳 サロン・ドートンヌの会員に推挙。
- 1958年 37歳 「野見山暁治作品展」(プリチストン美術館講堂)。
出品作品《岩上の人》が第2回安井賞を受賞。
- 1968年 47歳 東京藝術大学美術学部絵画科の助教授に就任。
72年、教授に就任。
- 1983年 62歳 初の回顧展「野見山暁治展」(北九州市立美術館、東京セントラル美術館)。
- 1996年 75歳 「野見山暁治展——その、動く気配の一瞬の形を」(練馬区立美術館)。毎日芸術賞受賞。
- 2005年 84歳 戦没画学生慰霊美術館「無言館」設立の功績により菊池寛賞受賞。
- 2008年 87歳 東京メトロ明治神宮前駅にステンドグラス壁画《いつかは会える》完成。
- 2011年 90歳 「野見山暁治展」(石橋美術館、プリチストン美術館)。
- 2014年 93歳 文化勲章受章。
- 2021年 100歳 「100歳記念 すごいぞ!野見山暁治のいま展」(日本橋高島屋S.C.、京都高島屋)。
- 2023年 102歳 「コレクションing4 野見山暁治の見た100年」(久留米市美術館)。
6月22日 逝去。



野見山暁治、2020年
NOMIYAMA Gyoji, 2020



練馬のアトリエにて、2021年
At his studio in Nerima, 2021

Selections from the Ishibashi Foundation Collection

Special Section

NOMIYAMA Gyoji

Nomiya Gyoji's primary field of expression was oil painting, but he was also active in a wide range of other fields, including printmaking, picture books, and writing. His career as a painter spanned approximately 80 years, from the prewar period, through the postwar period to the present day. His work developed along parallel lines with that of modern Japanese art history, but he kept his distance from the common trends to develop his own individual style. Sadly, he passed away in June of this year at the age of 102, the news of his death coming just as we were researching the works in preparation for this exhibition.

The relationship between the Ishibashi Foundation and Nomiya Gyoji dates back to 1952 when Ishibashi Shojiro, founder of the Bridgestone Museum of Art, was named as a member of a group of supporters who helped Nomiya travel to Europe to study in Paris. In 1958, while Nomiya was still living in Paris, the Bridgestone Museum of Art, the forerunner of the Artizon Museum, held an exhibition of his work. Around fifty years later, in 2011, the Ishibashi Museum of Art (now the Kurume City Museum of Art) and the Bridgestone Museum of Art combined to hold a large-scale retrospective exhibition of Nomiya's work entitled "Nomiya Gyoji Exhibition."

The Ishibashi Foundation currently owns seven works by Nomiya Gyoji, three of which were newly acquired in recent years. This special section will present the three new acquisitions the first time together with all the other works by him from the collection to allow viewers to appreciate the fascination of his work.

Cover Work



野見山暁治《振り返るな》2019年 新収蔵作品
NOMIYAMA Gyoji, *Don't Look Back*, 2019, Recent Acquisition

石橋財団コレクション

特集コーナー展示

野見山暁治

2023年12月9日(土) - 2024年3月3日(日)

アーティゾン美術館

企画・執筆: 上田 杏菜

デザイン: 田畑 多嘉司

藤江 尚美

秋本 真奈帆

翻訳: ギャビン・フルー

印刷: 株式会社 野毛印刷社

発行・著作:

公益財団法人石橋財団 アーティゾン美術館

〒104-0031 東京都中央区京橋 1-7-2

©長野聡史 (P.1-2)

©川津英夫 (P.13左)

©湊雅博 (P.13右)

©一般財団法人 野見山暁治財団

Selections from the Ishibashi Foundation Collection

Special Section

NOMIYAMA Gyoji

9 December (Sat), 2023 - 3 March (Sun), 2024

Artizon Museum

Curation and Texts: UEDA Anna

Design: TABATA Takashi

FUJIE Naomi

AKIMOTO Manaho

Translation into English: Gavin Frew

Printed by Noge Printing Corp.

Published by

Artizon Museum, Ishibashi Foundation

1-7-2, Kyobashi, Chuo-ku, Tokyo 104-0031, Japan

www.artizon.museum

